



ターンレフト ターンライト(向左走・向右走)

2004(平成16)年10月31日鑑賞(ホクテンザ2)

監督=杜 峰^{ジュニート} / 監督・脚本=韋家輝^{ワイ・カウ・ファイ} / 原作=據幾米^{ジュー・リミ} / 出演=金城武^{ジンギョウ} / 梁詠琪^{リョウエイキ} / 陳之財^{チン・チ} / 關 穎^{カン・エイ} (ワーナー・ブラザーズ映画配給 / 2003年香港映画 / 99分)

……すぐ近くにいながら、いつも右と左に別れ別れのすれ違い！ しかし、そんな2人にも運命の出会いが……。台湾の台北を舞台にくり広げられる金城武と梁詠琪の2人の純愛ストーリーはシンプルながら実に美しいもの。あなたも是非その感動を……。オレも早く台北に行かなくちゃ……。

新潟県中越地震と集集地震^{チーチー}

2004年夏以降、日本列島は記録的な台風連続による被害を受けたが、10月23日発生した新潟県中越地震によって、現在さらに深刻な被害を受けている。

日本同様、台湾もかなりの地震大国。1999年9月21日台湾を襲ったマグニチュード7.6の大地震は、台湾の中部に大きな被害を発生させたもので、集集地震と呼ばれるもの。

新潟での震災による被害が日々深刻となっている現在、こんなことを書くのは不謹慎かもしれないが、この映画では、台湾の中部を襲ったその集集地震が、このまま永遠に会えず、すれ違いを続けていくのではないかという状況下におかれていた2人の主人公を結びつける役割を……。

台湾でも新潟でも地震が悲惨な被害を招いていることを忘れてはならないものの、この映画では地震がこのように、2人の出会いに何とも感動的な役割を果たしていることは是非注目したい。

🎬 ちょっと無器用だが何とも魅力的な2人の若者！

この映画の一方の主人公劉智康（金城武）はバイオリニストの卵だが、今はまだ誰にも認められず、レストランで演奏のアルバイトの毎日。他方の主人公蔡嘉儀（梁詠琪）は出版社に勤める翻訳家だが、自分の大好きな詩の翻訳の仕事は回ってこず、これも不本意な仕事ばかりの毎日。

しかし、この2人の実力はスゴイ。ジョンのバイオリン演奏は私が聴いてもすばらしいと思うものだし、イブの詩の翻訳やその朗読ぶりも魅力いっぱい。そのうえ、ジョンはすごい「イケ面」だし、イブはすごい美人。なぜこんな魅力的な2人が世間から認められず、花を相手に演奏したり、犬を相手に詩を朗読したりしているのだろうか……？

張藝謀監督の最新作『LOVERS（十面埋伏）』（04年）で章子怡と見事にわたり合った金城武が、この映画では、1999年のシルビア・チャン監督の『君のいた永遠』以来、イブを演ずる梁詠琪と2回目の共演。ピュアな心としっかりとした自分の目的をもって人生をひたすら前向きに生きようとしている2人は、ちょっと無器用だが何とも魅力的な若者だ！

🎬 ケッタいなタイトルの由来と美しい詩

この映画のタイトルは一見ケッタイだが、実はそうではなく、きわめて正確にこの映画の本質を言い当てたタイトルだ。アパート（マンション）にA棟とB棟が対称的に並んでいるのはよくあること。そしてこの場合、入口も2カ所あるのが当然。

そうすると、A棟とB棟の中心部の部屋は壁1枚で接していて、入口は左右に分かれて2カ所あるため、A棟の住人とB棟の住人が顔を合わせることはないことになる。

この映画では、ジョンは右側の入口を、イブは左側の入口を通るうえ、いつもジョンは右側に曲がり、イブは左側に曲がる癖があったから、この2人は本来永久に出会うこともなかったはず……。

こんな単純でわかりやすい状況設定の下で2人の若い男女の「出会える力」を描いたのがこの映画だから、このタイトルは実にピッタリ。

もう1つ、この映画で大きなウエイトをもっているのが「2人は信じる。求める気持ちが出会わせたと信じ合う心は美しい。でも揺れ動く心はもっと美しい」とい

うポーランドの詩人ヴィスワヴァ・シンボルスカの『恋』という美しい詩の一節。

もちろん、私はこんな詩があることはこの映画ではじめて知ったが、イブがこの詩を朗読するのをじっと聞き入り、以降この詩を自分の生きる原動力としたジョンの姿をみていると、つくづく一つの詩のもつ力の偉大さを感じることができる。

■いたずらモノの雨

少年少女時代の出会いと別れの後、13年を経て2人が運命の再会を果たしたのは、新北投公園の噴水池。

その再会シーンはそりゃロマンティックなものだから、それは映画を観てのお楽しみに……。

これによってお互いの人生は180度転換し、それまでの孤独で不本意な生活からバラ色の生活へと変わるはずだった。

ところが、これを邪魔したのがわか雨。にわか雨の中で2人が大急ぎで交換し合った電話番号を書いたメモ用紙は、何と無残にも雨に濡れてその数字が判読できないことに……。頭1ケタ、2ケタの数字は読めても、その後が読めなければ連絡は不可能。次々と電話をかけても、そりゃ天文学的回数になってしまうのは当然。

これ以降長々と続く愛する2人のすれ違い物語(?)は、多少コメディタッチになりそうな面もあるものの、大筋としては観るものの心をジーンとさせ、何とか応援してやろうと思わず身を乗り出したくなるようなシーンの連続。

■邪魔者の2人は?

お互いを求め合う気持は強いものの、内気で生真面目な性格が共通しているジョンとイブは、劇的な13年ぶりの「再会」を果たした後は2人とも有頂天となり、周りのことはほとんど目に入らない状態。しかし前述のとおり、この2人は本来的に魅力たっぷりだから、ジョンには小紅シャオホン（テリー・クワン 關 穎）が、イブには胡医生ドクター・フー（エドマンド・チェン 陳 之 財）が目ボレ(?)。

ドクター・フー 胡医生は美しいイブに惚れて、「結婚してくれ」というだけだから罪はない(?)が、2人の部屋に出前の料理を運んでいく中で、この2人こそがお互い求め合っている運命の2人だとわかっている小紅シャオホンの取る行動は、何とも憎たらしい(?)もの。将来有望なバイオリニストだと値踏みして、そのお嫁さんになりたいと願っているこ

とを差しひいても、その意地悪さはやっぱりひどく憎たらしいもの……。

もっとも、この小^{シャオホン}紅の意地悪さというスパイスがよく効き、2人のすれ違いぶりが強調されていることが、ラストの大きな感動につながっていくのだが……。そう考えて、この2人の邪魔者にも助演賞を差しあげなければ……。

憧れの台湾旅行も！

この映画の舞台となるのは台湾の台北市内にある場所ばかり。中でもストーリー構成上大きな役割を果たすのは、2人が学生（中学生？）の時、修学旅行で行ったメリーゴーランドのある八仙樂園とその13年後に運命的な再会をする噴水池のある新北投公園で、両方とも素朴で美しいところだ。

また2人が住むアパートや人が行き交う繁華街そして映画の冒頭に登場する雨（みぞれ）の中、長い横断歩道の前で信号待ちしている印象的なシーンを撮ったのは台北市政府前広場とのこと。

是非近いうちに1度行ってみたいものだ。

2004(平成16)年11月1日記